

# あがつま



『わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。

わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。』

(ヨハネによる福音書15章5節)

## ♪ 賛美歌を歌おう ②③

『われをも救いし』

讃美歌第二編 167番

『アメイジング・グレイス』

として広く知られているこの歌は、イングランド出身のジョン・ニュートン(1725-1807)によって作詞されました。ジョンは十一歳の頃から、貿易船の船長をしていた父親の船に乗り込み、地中海への航海を数年間に渡って経験しました。

ジョンの人生の歯車が大きく狂ったのは十八歳の時です。彼は海軍に捕らえられたのです。当時のイギリス海軍は、強制徴募隊により、使えそうな若者を手当たり次第に水兵として連行して行きました。

ジョンの父親も軍に抗議をしましたが、航海経験豊富なジョンの下船は認められ

ません。ジョンは隙を見て脱走を試みますがすぐに捉えられ、脱走歴のある下っ端としてより厳しい待遇に処されることとなります。

一方で船長にとっても、反動的で、船長を殺害し、海に身を投げて自殺することまで考えていたというジョンは厄介者でした。そのためか、西アフリカに停泊していたギニア商船の船員とジョンとのトレードが行われ、ようやくジョンは軍役から解放されます。

ジョンを引き取ったギニア商船は、アフリカで乗せた黒人達をアメリカへと運ぶ奴隷商船でした。ジョンは、アフリカ南部で、集められた黒人達を船に乗せる役務をこなしていましたが、その待遇は非常に過酷で、食事も満足に得られない中で、彼は父親に助けを求めます。

「ジョンからの手紙を受け取った彼の父は、友人に依頼して商船グレイ・ハウンド号を救出に向かわせませす。はたしてジョンを助け出したグレイ・ハウンド号でしたが、イギリスへ帰る途上、嵐に見舞われ沈没寸前の危機に陥ります。必死の排水作業に疲れ果てた彼は、これまで人生を省み、「こんな罪深い人間を神が許すはずがない」と考えていたといいます。」

それでも、なんとか嵐のり越えたグレイ・ハウンド号でしたが、嵐の日から一か月もの間、壊れかけた船は風まかせで漂流します。いよいよ食料が尽きると言うときに、風向きが変わりアイルランド北部に漂着したといいます。生還を果たしたジョンは、そのときこう呟きます。私には分かる。祈りを聞き届けて

くださる神は存在する」と。このような回心を経験した彼ですが、その後も数年間奴隷貿易に従事し、奴隷船の船長まで任されています。後に自ら語っています。この時はまだ奴隷貿易自体が罪だとは考えていなかったようです。

三十歳のとき、病気のために船を下りたジョンは、税関職員として働きながら、神学を学びプロテスタント教会の信徒牧師として知られるようになります。そして三十八歳のとき、英国国教会の聖職者となり、イングランド中部のオルニーという小さな村に赴任し、この地で人々に少しでも分かりやすく福音を伝えようと作詞した賛美歌の一つが、『アメイジング・グレイス』だったと言われます。

ジョンが五四歳のとき、そこで作られた賛美歌をまとめた

『オルニー賛美歌集』が出版され、アメリカの教会でも彼の賛美歌が歌われるようになっていきます。この頃からジョンは奴隷廃止運動に関わり始め、六三歳のときには英国議会で奴隷船の悲惨さを訴えています。そして一八〇七年、イギリス国会法で奴隷貿易が廃止が可決されたことを見届けたかのように、同年一二月、八二歳の生涯を終えています。

『アメイジング・グレイス』は、黒人霊歌と紹介されることとがあります。奴隷船の船長だった白人が作った歌が、奴隷として売られた黒人たちによっても愛され歌われてきたこともまた、『信じられない恵み』の表れなのかもしれません。(稲垣)

